2話　社会人学生 …… 究める意欲が漲る

平成十四年四月九日

京都では、数年前から市内四十余りの大学・短大が連係して「大学コンソーシアム京都」をつくり、単位互換を行っている。つまり、その加盟校のどこかに入れば、どこでも一定範囲内の提供科目を受講できる。

しかも、人数に制限はあるが、一般の社会人もその提供科目を受けて単位を取ることができる。さらに一昨年来、京都駅の近くに新築されたモダンな校舎「キャンパス・プラザ京都」へ、各大学から教員が出向いて行う〝出前講義〟もある。

この計画に協力を求められた私は、喜んで応じた。同じ教室で他大学の学生や社会人も一緒に学べば、お互いに刺激を受けられると思ったからであり、事実おおむね成功している。ただ素直にいえば、現役学生よりも社会人学生のほうが、はるかに熱心である。

たとえば、『産経新聞』大阪本社企画の「新・日本学講座　関西発」で、昨年六月、私の「祭――マツリ文化の再発見」（本書の末尾に要旨付載）を聴かれた和歌山市在住の男性は、七十歳近い元公務員であるが、新学期から私が大学で行っている一般教養科目「日本の年中行事」を毎週欠かさず受けに来られ、今春からアドバンス・ゼミにも参加を希望しておられる。

また、秋学期の出前講義を行っている「平安宮廷文人の世界」は朝一時限にもかかわらず、数人の社会人学生が来聴され、時折かなり鋭い質問も飛び出す。そのうちの一婦人は、今春から大阪の女子大学へ再入学され、古典の研究をしておられる。

このような社会人学生に接して、いわゆる生涯学習が質も量も急速に向上し拡大しつつあることを実感するに至った。これらの人々には、本当に好きなこと、知りたいことを真剣に究めたいという意欲が漲（みなぎ）っている。

先般、小泉首相が国会で施政方針演説に引用して広く知られるようになった名文句がある。

「少にして学べば、壮にして為すあり。壮にして学べば、老にして衰えず。老にして学べば、死しても朽ちず」（勧学三誡）

これは江戸後期の儒学者、佐藤一斎（一七七二～一八五九）の著『言志四録』にみえる。一斎は美濃の岩村藩家老の次男に生まれ、大阪で中井竹山、京都で皆川淇園、江戸で林述斎に学んだ。そして文化二（一八〇五）年から昌平黌（東京大学の前身）の塾長となり、庶民も聴くことのできた彼の名講義は、米寿で没する直前まで続けられた。

その一斎は「春風を以て人に接し、秋霜を以て自ら慎む」ことを常に心がけていたという。このような先人の英知を身につけることこそ、生涯学習の意義ではないかと思われる。